

わからないコトバ、わからないモノ ——「って」の用法をめぐって——

藤 村 逸 子

0. はじめに

本稿は、主題文にあらわれる「って」の用法を取扱う。出発点は、次のような「変な」言い回しである。若者が(1)、(2)のような文で、「って」を「は」のかわりに使うのを最近よく耳にするようになった。

- (1) (目の前のものを指さして)
これって何ですか？
- (2) 今日って何日ですか？

このような文に抵抗を感じる日本語話者は筆者のみでないが、その勢いには、単なる誤用やはやり言葉とは思えないものがある。筆者が名古屋大学の学生48名を対象にして行ったアンケート調査では、(1)、(2)を「全く自然(若者言葉的でさえない)」と答えたものの割合はどちらもほぼ2割であった。「って」のこのような用い方は許かれたテキストの中でさえも、話し言葉の引用の形としてではあるが散見される。

- (3) 「... リボヴェツキーは、こうしてモードが硬直化したイデオロギーを解体してゆき、モード社会がデモクラシーを完成してゆく、と言う。ポストモダンも柔軟でしなやかな個の成熟の時代なのである」(...)
それってほんとに「個の成熟」?—と訊ねてもしょうがない。「モード」という「反」小説はそう説者に教え、説者は半ば本気でそれを信じようとしている...
(高橋源一郎、「朝日新聞」、1991. 6. 25 (下線筆者))

しかし、次の100%許容される「って」と比べてみると、(1)、(2)、(3)は文法性、すなわち日本語の文法への組み込まれの度合いが低いと考えられる。

- (4) 「未到の幽境」ってなんですか。
- (5) A: それ、とって。
B: それって、どれ？

本稿の目標は、第1に、(1)、(2)、(3)のような「って」の用い方の文法性が劣るのはな

ぜか、第2に、それにも関わらずこのような使い方が見られるようになってきている理由はなぜかという2つの疑問に答えることである。調査の結果を見る限り、20歳前後の若者層には(1)、(2)、(3)と、(4)、(5)の間に許容度の差を全く認めないものが数多くあり、今のうちにこの差を記述しておかなければ、消滅してしまうのではないかという緊急性さえ感じる。調査結果とその分析は別稿で取り上げることにし、本稿では、理論面からこの問題を考えることにしたい。

以下では1でまず、「って」の統語的位置づけを行ったあと、2で、コトバ自体について語るメタ言語の用法が「って」による表現の基礎にあることを明らかにする。3では、「って」がモノについての記述文に現れる場合にも、それをコトバ自体についての説明文とも解釈できるのが普通であることを示す。最後に、コトバについての説明とは解釈できない(1)、(2)、(3)のような用法の出現が何に由来するのかを考える。

1. 「って/というのは/とは」

「って」は一般に(6)のように、引用の格助詞「と」の文体的なヴァリエントとして、くだけた話言葉で用いられる。同じ「と」でも、随伴の「と」など、それ以外のものは「って」にならない。「って」に置き変わるのは引用の「と」だけである。

- (6) 太郎にあったら、早くお帰り |と/って| 言ってください
- (7) 昨日は、こども |と/*って| 遊んだよ
- (8) 先生を学生 |と/*って| 間違えた

しかし、上の(1)から(5)の「って」を「と」で置き換えることは不可能である。

- (9)*「未到の画境」と なんですか ((4)の意味で)
- 00*それと どれ? ((5)の意味で)

むしろこの場合の「って」は、「というのは」や「とは」のくだけた言い方と考えられ、次のように、置換が可能である。

- 01 「未到の画境」|とは/というのは| なんですか
- 02 それ |とは/というのは| どれ?

「って」は、引用の「と」の後ろに続く「は」または「いうのは」が省略された文体的なヴァリエントなのだろうと思われるが、省略形であるだけに、問題はやっかいである。「って」、「とは」、「というのは」の分布は等しく重なるわけではない。「って」は、「とは」や「というのは」よりも使用の制限が緩い。上の(1)、(2)、(3)のような「って」

を、「とは」や「というのは」に変えるとその許容度は一層低下する。

03 (目の前のものを指さして)

*これ |とは/というのは| 何ですか

04 *今日 |とは/というのは| 何日ですか

05 *それ |とは/というのは| 本当に「個の成熟」?

それでは、「って」には、「とは」や「というのは」とは全く異なった用法があるのかといえ、そうとも言えない。若者であれ、「は」のかわりにいつも「って」が用いられるわけではないが、そのときには「とは」も「というのは」も用いることができない。

06 雨 |は/*って/*とは/*というのは| 上がったよ

07 田中君 |は/*って/*とは/*というのは| 昨日学校を休んだよ

逆に、「とは」、「というのは」が可能であれば、文体的な制約は別にして、「って」も可能である。

08 自動車 |とは/というのは/って| 走る凶器だ

また、次のような例では「とは」の使用は不可能であるが、「というのは」と「って」は問題がない。

09 田中君 |は/*とは/というのは/って| よく学校を休むね

ここでは「とは」、「というのは」、「って」の三つの形式は、「とは」を中心にし、同心円の構造をなしていると一応仮定して論をすすめることにする³⁾。「とは」、「というのは」、「って」の順序で外へ向かうほど使用の制限は弱くなるが、「というのは」は「とは」の価値を、「って」は「とは」と「というのは」の価値を引き継いでいるということである。はじめに見た変な「って」の用法がこの延長線上で説明できるならば、この作業仮説は正しいということになる。したがって、以下ではまず、「とは/というのは/って」のどの形も用いることができ、しかもこれらの内のどれかをを用いなければならない例から検討を始めることにしよう。この条件での用法が「って」の中心的な用法と考えられるためである。

2. わからない語、メタ言語的用法

2. 1. 「とは/というのは/って」が必ず現れる場合

「とは/というのは/って」の典型例は次のようなものである。

- ⑳ 「あの二回生はダブったんだ」「でも<ダブる>ってなに?」「<ダブる>というのは留年することだよ。<留年>というのは<進級試験にしくじること>なんだ。」「それで、<二回生>というのは何だい」、学生ことばにうとい相手はさらに聞き返す。「<二回生>とは<二年生>のこと（あるいは意味）だよ。」²⁾
(ヤコブソン, 『言語とメタ言語』(1984), p. 109)

⑳の「とは/というのは/って」はすべて相互に置換可能である。質問の文の中の「とは/というのは/って」は、「は」に置き換えることができない。答の文の方の「とは/というのは/って」は、「は」に変えることもできるが、多少不自然である。

- ㉑ 「あの二回生はダブったんだ」「*でも<ダブる>はなに?」「?<ダブる>は留年することだよ。?<留年>は<進級試験にしくじること>なんだ。」「それで、*<二回生>は何だい」、学生ことばにうとい相手はさらに聞き返す。「?<二回生>は<二年生>のこと（あるいは意味）だよ。」

⑳は、コトバ自体を問題にして語る文、すなわちメタ言語文の例としてヤコブソンが挙げたものである。メタ言語文の中では、語(群)が、普通の場合とは異なった意味で用いられることがある。⑳では「とは/というのは/って」の前の<ダブる>、<留年>、<二回生>がそれにあたり、それぞれ、記号としてのその語(群)そのものを表している。この用法は「自己指示 (autonymie)」と呼ばれ、最初の文(「あの二回生はダブったんだ」)の中で記号が言語外の事物を表して用いられているのとは明らかに違っている。自己指示語の最もよい例としては辞書の見出し語がある。

「とは/というのは/って」は典型的な場合に、その前にくる語(群)が自己指示語であることを表すと言えるのであるが、自己指示であれば必ず「とは/というのは/って」がつくというわけではない。例えば次のような場合である。

- ㉒ シャトーはフランス語で城のことです
㉓ 「終わる」は他動詞ですか?

㉑ からわかるように、「とは/というのは/って」が不可欠なのは、話し手が記号の内容を理解していない状況で、記号の内容の定義を求めたり、内容の説明を求めたりする場合だということが言える。

外国語の表現の意味を尋ねる状況が、例としてわかりやすいだろう。例えば㉓のフランス語の文の単語の意味がわからなければ、語学の教室で日常的に行われているように、「とは/というのは/って」をつかって尋ねるしかない。

- ㉔ Pierre travaille beaucoup

- ②4 Pierre |とは/というのは/って| なんです
 ②5 travaille |とは/というのは/って| なんです
 ②6 beaucoup |とは/というのは/って| なんです

フランス語を知らない人にとって、Pierre, travaille, beaucoup という表現は内容を全く欠いた記号である。しかしそれが単なる音ではなく記号だということ、つまり何かを意味することはわかっている。わからない記号表現 (= signifiant) を引用し、その内容 (= signifié) を問題にして尋ねる疑問文では、「とは/というのは/って」が必ず必要になる。

「というのは/って」の先行研究である田窪 (1989) は、メンタル・スペース理論の立場から次のように述べている。

「って/というのは」は、価自体が存在しない記述を示す。つまり、記号の名前だけを示す表現である。これらは相手がこちらのスペースの状態を想定し誤った場合、第三者の誤解を正すときに現れる。また、記号を新しく定義するとき、また、自分自身の発見により、記号を定義し直すときにも使われる。

(田窪 (1989) p. 231)

この説明は、我々の用語を用いて言い換えるなら、「って/というのは」には、内容を欠いた自己指示語を導く働きがあるということになり、適切な指摘だと考えられる。ただし、田窪が記号表現のことを「記号の名前」というのは適当でない。たとえば「やじるし」は (→) という視覚的な記号の名前だといえるが、どこかに (→) が描いてあって、それが何を意味するのかわからなくても、「やじるしというのは何ですか」という風に尋ねることはできない。②4の「Pierre というのは何ですか」に相当するのは、敢えて言えばこの状況では「→ というのは何ですか」である。これと「やじるしというのは何ですか」とは同じではない。「Pierre というのは何ですか」の意味で、「この単語というのは何ですか」と言いかえられないのと同じ理由による。「とは/というのは/って」の前に現れるのは、解説のできない記号表現そのものなのである。

2. 2. わからない語の構造

Rey-Debove (1978) はメタ言語に関する大著であるが、その表記を借りると、「とは/というのは/って」が必ず必要なのは、その前にくる語が、E₁ (E₁ (C₂)) の構造をしている場合ということになる。E は Expression (表現)、C は Contenu (内容) の略であり、() はそれを内に含むという意味である。普通の記号は E (C) という構造をもつ

ている。次の対話を例にして考えてみよう。

㉓ A: ヒマラヤンに興味があるんだ

B: ヒマラヤンってなに?

話し手Aは「ヒマラヤン」という語を、内容を備えた普通の記号として使っている。Aにとって「ヒマラヤン」はE(C)である。Aは「ヒマラヤン」と表現することで、「ヒマラヤン」という内容が相手に伝わると思っている。ところがBにはAのいう「ヒマラヤン」の内容がわからず、聞き手Bにとってこの記号はE(C?)ということになる。Cについた?は記号の内容が不明であることを意味する。そこでBは話し手として、内容のわからないその表現そのものを表現する。Bのいう「ヒマラヤン」は、「ヒマラヤン」という、内容のわからない記号表現そのものを内容とする表現なので、E₁(E₁(C?))の構造になる。E₁(E₁(C?))の両方のEに共通してついているインデックスの1は、Bの用いる「ヒマラヤン」が、Aの使った「ヒマラヤン」という表現と全く同形であること、つまり引用であることを示している。

わからない表現を指し示しているも、次のように違った表現でそれを表せば「とは/というのは/って」は、すでに述べたように普通は使えない(ただし、若者言葉では使われる)。

㉔ B: それってなに? そのヒマラヤンって

この場合の「それ」は、E₁(E₂(C?))という構造をなしており、2つのEの形が同一ではないためである。ちなみに、この例で「それってなに」が奇妙なのは「それ」という語そのもののせいではない。次例(=5))の「それ」は、E₁(E₁(C?))の構造をした、表現それ自体を示す表現であるため、「とは/というのは/って」が完全に許容できる。

㉕ A: それ とって

B: それって どれ?

3. わからない語=わからないモノの場合

しかし、E₁(E₁(C?))の中のC?というのは一体何なのだろうか。「とは/というのは/って」を用いた疑問文では、そのC?の部分の説明が求められているわけだが、それが何なのかという問題には、難しい種々の点が含まれている。上でみた外国語の例や、小さな子供のまく「ユートーサーって何?」、「フトクイって何?」、「イキナリって何のこと?」など、記号であるという以上の情報を持たずに記号の意味を尋ねるのはむしろ

例外的な状況である。このような場合には、文がメタ言語文であることに疑いはない。しかし、表現が文脈の中で使われたものである限り、たとえそれがはじめて聞いた表現であったとしても、ある程度の内容は推測できるのが普通である。全く内容のわからない完全に不透明な表現から、内容がほぼ透けて見える透明に近い表現まで、「わからなさ」の度合は様々である。

外国語の場合なら、「Pierreって何？」と聞かれたときの答は「ピエールというのは人の名前」でもよい。まったく「Pierre」という表現について知識のない人にとってはこれも有効な情報となる。しかし、次のような場合に同じように「人の名前」と答えたら、それは冗談か、あるいは答を拒絶していることにしかならないだろう。

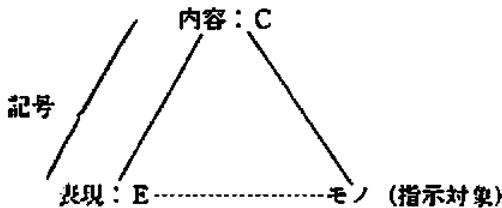
- 00 A: 斉藤さんにあつたよ
 B: 斉藤さんって？
 A: *斉藤さんというのは人の名前だよ

この場合のBには、Aの言う「斉藤さん」という表現に、その内容として「人」が含まれていることはわかっている。それがわかっているAは「斉藤さん」という記号に關してそれ以上の情報をBに提供する必要があり、例えば次のようにいう。

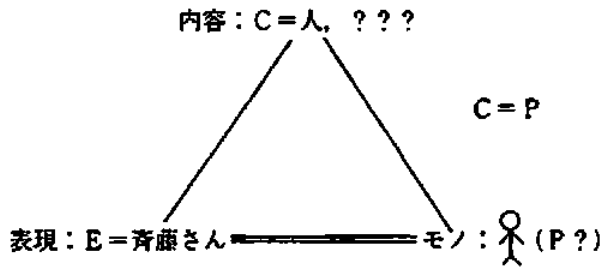
- 01 斉藤さんというのは、フランス語のクラスにいる眼鏡をかけた女の子だよ

さてこの場合の「斉藤さん」は、記号そのもの、すなわち E_1 (E_1 (C?)) なのだろうか。それとも、外界の事物を指す普通の記号 E (C) なのだろうか。言い換えると、01の「斉藤さん」は、記号なのか、あるいはその指示対象としてのモノなのかという問題になる。

結論から言うと、「とは／というのは／って」がつくのは、本稿の最初でみた最近の「変な」言い方を除き、一貫して記号そのものであると考えることが可能である。そうでない限り、これらの形は原則として用いることができない。有名な記号の3角構造を借りて、考えてみよう。

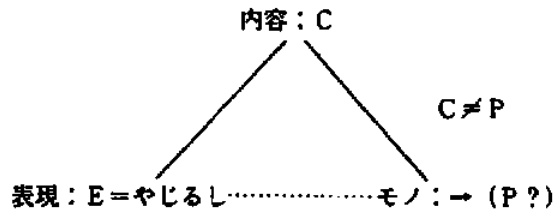


- 01の「斉藤さん」を図示すると、次のようになる。Pはモノの属性を表す。



B0の文脈では、「斉藤さん」の指示対象がBにわからないことが問題になっている。それをわかるようにするために、AはB0のように説明しているのであるが、その際にAがモノである「斉藤さん」を説明しているのか、記号の「斉藤さん」を説明しているのかはこの例だけを見る限り、見分けをつけることはできない。それは固有名詞という特殊な記号の特徴に由来している。固有名詞では、記号とその指示対象が一对一の関係にある。そのために指示対象の属性は記号内容に等しいのである。

それでもなお、「とは/というのは/って」のついたB0やB1の「斉藤さん」を記号であると考えたい理由は、記号内容と無関係に、特定の指示対象の属性を述べる場合にはこの形式を用いることができないためである。上で挙げた「やじるし」の例で考えてみよう。



この場合の指示対象（モノ）は、標識として道路上に存在する特定の<→>だとする。この<→>には一方通行を示すという属性があるとしよう。表現「やじるし」はモノ<→>を指示対象とすることができるが、特定の<→>の属性である「一方通行」は記号「やじるし」の内容には含まれていない。つまり、<→>の属性Pは記号である「やじるし」の内容Cとは無関係である。これは、「やじるし」といった普通名詞は特定のモノと一对一の関係を構成しないためである。この場合には、特定の<→>を指して、「やじるしって何?」「やじるしって一方通行のこと」というふうには言うことはできず、「あのやじるしは何?」「あのやじるしは一方通行のこと」と言わなければならない。この事実から推論できるのは、上の固有名詞の場合における、「って」のついた、「斉藤さんって誰?」「斉藤さんって眼鏡をかけた子」の「斉藤さん」は、指示対象としての「斉藤さん」ではなく、記号表現としての「斉藤さん」なのだろうということである。少く

ともそのように分析することが可能である。

普通名詞と一対一の関係にあるのは特定のモノではなく、その記号で呼ばれるモノの集合である。つまり普通名詞の場合には、指示対象が集合、すなわちカテゴリーであれば、図は固有名詞の場合と同様になる。その時には、〈記号の内容＝カテゴリーに典型的な属性〉という等式が成立し³⁾、それをたずねるために、次のように言うことができる。

㉓ A：ねえ、ページプリンターってどんなもの？

B：ページプリンターというのは、コンピューターに付属の印刷機で、...

ある記号がモノと一対一の安定した関係にあるというのは、記号がそのモノの名前であるということに等しい。言語表現に不透明さがあつたとしても、それが人の名前や、機械の名前であるという程度のことにはわかるのが普通であるが、この条件下では、記号の内容の説明は、モノの属性の説明と等しくなり、メタ言語文と普通の文の境界は定かでない⁴⁾。

4. 名前しかわからないモノから単にわからないモノへ

以上で述べたことによつて、次のような文が説明できるかどうかを考えてみよう。これらは、述語が記述性の述語であるため、一見したところ記号の内容を語るメタ言語文とは考えにくい。

㉔ 山田さんってふざけてる

㉕ ねえ、留守番電話って便利？

しかしこれらの文では、上でみた、〈指示対象の属性＝記号の内容〉の等式が成立している。つまり、記号と指示対象の一対一対応を充しているために、記号の内容を語る文であり、なおかつ指示対象の属性を語る文でもあり得る⁵⁾。

記号の内容の説明とモノの説明が根本的に異なる点は、記号内容が時空間から切り離された恒常的なものでなければならないのに対し、モノはまさにモノであつて、刻々と様相をかえうる点にある。また普通名詞の場合、その記号内容は、その名で呼ばれるカテゴリーの特性に等しく、個々のモノの性質に等しいとは限らないことは上で述べた。㉔、㉕のような文が、メタ言語的用法から派生していると考えられるのは、これらの文が以上の2つの条件を充しているからである。

㉔を観察してみよう。㉔の述語の「ふざけてる」には潜在的に、「ひどい人だ」とか「いい加減な人だ」といった恒常的な性質を表す意味と、特定の時空間で「ふざける」とい

う一時的な動作をする意味の両方があるが、③3は、恒常的な属性としての意味にしかとれない。一方、「って」の代わりに「は」を使った③9では、恒常的な属性と一時的動作の両方の意味が可能である⁶¹。

③9 山田さんはふざけてる

③4では、「留守番電話」は、総称の「留守番電話」である。個別の「留守番電話」を前提とするような述語、例えば「調子いい」などに変わると、奇妙な文になる。「って」を「は」に変えると、個別の「留守番電話」（例えば、この間一緒に買いに行った「留守番電話」）に関する文として全く自然である。

③6? ねえ、留守番電話って調子いい?

③7 ねえ、留守番電話は調子いい?

それでは、同じように恒常的な属性をあらわす際に、メタ言語的に指示対象の名前を引用する形の「とは/というのは/って」を使うのと、「は」を用いて完全な記号の形で指示対象を表現するのとではどのような違いがあるのだろうか。③8と③9を対比させて考えてみよう。

③8 フランス語とはどんな言語か

③9 フランス語はどんな言語か

③8、③9を本のタイトルだとすると、③8をつかうのはレトリックである。著者がフランス語について現実にその名前しか知らないということはあるにない。しかし③9には、「フランス語」という言語名は知っていても、それ以上多くを知らない初学者を读者として引き付ける効果や、「フランス語」というモノについての一般的な知識を一旦すべて無効にして「フランス語」という記号を定義し直す形で、「フランス語」というモノの属性を全て網羅的に記述しようとする意図を表明したりする効果がある。③9は、フランス語について知識のある人が上段に構えて、答を求めているようなニュアンスがある。

基本的に「とは/というのは/って」が用いられるのは、記号の内容がわからないので記号の説明を求めるために記号表現のみを引用する場合であった。内容のわからない記号表現の説明は、名前しかわからないモノの説明と重なり合う。そして最初に見た若者ことば的な(1)、(2)、(3)は、名前しかわからないモノを表す用法が変化して、単に正体のよくわからないモノを指すための用法へと変わろうとしていることを示している。

(1)、(2)、(3)における「これ」、「それ」、「今日」は直示詞であって、モノを直接指示している。これらの記号はモノと一対一の関係をつくらないためにモノの名前ではな

く、(記号の内容=モノの属性)という等式を成立させない。したがってメタ言語的解釈も、名前しかわからないモノの説明という解釈も全く不可能であり、それがこのような用法の文法性の劣る原因となっている。ただし、(1)、(2)、(3)を観察すると、「これ」、「今日」、「それ」が正体のよくわからないモノを指していることはわかる。「これって何？」は許容されても、「これってコンピューターだよ」は許容されにくいことがそれを物語っている。名前しかわからないモノから、単に正体のわからないモノへの移行の道筋には論理性があり、突然変異的なものでないといえるだろう。それゆえに、(1)、(2)、(3)のような用法は、一時的な流行に終わらず生き延びる可能性があるように思う。

5. まとめ

最初の(1)、(2)、(3)の例の文法性が低い理由は、「これ」、「今日」、「それ」などの記号表現が、その指示対象であるモノと一対一の安定した関係を作っていないからである。この条件を充たしていない限り、記号表現を表す「とは/というのは/って」を用いてモノの属性を求めたり述べたりすることは普通はできない。しかし、記号表現であることの明示(引用形式)自体に、その内容が不明であるという前提があるので、名前しかわからないモノ、さらにただ単にわからないモノを指す方向へと変化する下地はもともと存在する。それが(1)、(2)、(3)のような用法の準拠をしていると考えられる。

「とは/というのは/って」に関しては、「これ」、「今日」、「それ」とよく似た性質の記号でありながら、「僕とは一体何なのだろう」や「あなたって馬鹿ね」などの「僕」、「あなた」がなぜ完全に許容されるのかなど、興味深い問題は他にも多々あるが、これらの問題の検討は別稿に譲らざるを得ない。

【注】

- 1) 「というのは」には、「の」がどの様に解釈されるかの問題があって、この構造は実際にはもっと複雑である。本稿ではこの問題に立ち入らない。
- 2) フランス語では、④は次のように翻訳されている。最後の être を使った文は総称文と形式的には全く同一である。

"Le sophomore s'est fait coller." "Mais qu'est-ce que se faire coller?" "Se faire coller veut dire la même chose que sécher." "Et sécher?" "Sécher, c'est échouer à un examen." "Et qu'est-ce qu'un sophomore?" insiste l'interrogateur ignorant du vocabulaire étudiantin. "Un sophomore est (ou signifie) un étudiant de seconde année." (Jakobson (1963), p. 218)

フランス語では自己指示語の明示的な表示は、語を3人称単数・無冠詞で扱うことによっ

てなされる。例えばランボーが、*Car je est un autre*。「私とは他者なのだから」と言うときの3人称扱いの *je* は、ランボーを指さず、*je* という語を指す。しかし、このような表示がいつもなされるわけではなく、日本語の「とは/というのは/って」に比べると範囲はずっと限られている。

- 3) これは、記号の *signifié* とはなにかという、言語学、哲学、心理学の重大なテーマに関わる。ソシュールは、記号の意味とは他の記号との対立においてのみ取り出すことのできる否定的なものだと考えた。ソシュールに従えば、記号の指示物の百科事典的な属性は、記号の意味ではない。しかし最近のプロトタイプ論では、ソシュール流の意味と百科事典的な意味の間には境界がないと考えられるようになってきている (Kleiber (1989, 1990), Martin (1990) 参照のこと)。本稿が示す事実は、この立場をサポートするものと思われる。
また固有名詞に「意味」はあるのかという問題も、古くから繰り返されてきた議論であるが (Kleiber (1984), Wilmet (1986)), 本稿の事実を見る限り、固有名詞にも普通名詞と同じような「意味」があると云わざるをえない。
- 4) メタ言語文を普通の文から区別することの困難は多くの研究者が指摘している。Rey-Debove (1978), Fuchs (1982), Riegel (1987) を参照のこと。
- 5) 注3と関連するが、「留守番電話」という記号に、「便利だ」というような主観的な属性がその記号内容として含まれているとは普通は考えられていない (注3の文献参照)。しかし日常のメタ言語活動は、言語学者が行うそれとは違って主観的なものである。この問題に関してここでは議論しないが、これはコトバとモノの境界がいかに曖昧であるかにかかわる問題でもある (注4も参照のこと)。
- 6) この事実は、坂原 (1990) からヒントをえた。

【参考文献】

- Fuchs, C. (1982): *La paraphrase*, PUF
- Jakobson, R. (1963): *Essais de linguistique générale*, Paris, Minuit
- Kleiber, G. (1981): *Problèmes de référence: descriptions définies et noms propres*, Paris, Klincksieck
- Kleiber, G. (1984): "Dénomination et relations dénominatives", *Langage* 76, p. 77-94
- Kleiber, G. (1989): "Généricité et typicalité", *Le Français moderne* 57-3/4, p. 127-154
- Kleiber, G. (1990): *La sémantique du prototype. Catégories et sens lexical*, PUF
- Martin, R. (1991): "Typicité et sens des mots" in D. Dubois, *Sémantique et cognition. Catégories, prototypes et typicalité*, p. 151-159
- Rey-Debove, J. (1978): *Le métalangage. étude linguistique du discours sur le langage*, Le Robert
- Riegel, M. (1987): "Définition directe et indirecte dans le langage ordinaire: les énoncés définitoires copulatifs", *Langue Française* 73, p. 29-53
- 坂原 茂 (1990): 「役割、ガ・ハ、ウナギ文」『認知科学の発展 第3巻』講談社, p. 26-66
- 田窪行則 (1989): 「名詞句のモダリティ」, 『日本語のモダリティ』くろしお
- Wilmet, M. (1986): "La détermination des "noms propres"" in J. David & G. Kleiber (ed) *Déterminants. syntaxe et sémantique, Recherches linguistiques XI*, p. 317-330
- ヤコブソン, R. (1984): 『言語とメタ言語』勁草出版